

慈徳が置いていった童子が、うかがうように冬弦の顔を仰いでいる。寒いのか、それとも心細いのか、肩や唇を震わせていた。

冬弦は、安心させるように、子供の頭を撫でた。冬弦の臍あたりまでしか、背丈がない。だいぶ幼いようだ。歳は、いくつになりますか？」

「九つでございます」

尋ねると、意外にはつきりした口調で答える。言葉遣いも粗野ではない。

「九つ……。というと、鳥羽上皇がお隠れになり、保元の乱が起こった年に、生まれたのですね」

なにか因果を感じたのだろうか、冬弦は、しみじみと子供を見つめた。

「名はなんといいいますか？」

「慈徳坊には、花芽と呼ばれていました」

「おや、慈徳坊にしては、かわいらしい呼び名をつけたものですね」

「出会った時に、私が花の芽を食べていましたので」

孤児が腹を空かせて、山野の花を摘んで食べていたのだろうか。この季節なら、梅の花か。冬弦は、不憫に思い、熱くなった目頭を袖で押さえて、いつそう子供を見つめた。

「では私が、なにか良い名をつけてあげます。そうですね、瑠璃若というのはどうですか？」

子供は、瑠璃若という名を、何度か口の中で呟いた。やがて、冬弦の瞳を見つめて、首を傾げた。

「瑠璃」とは、聞いたことはありませんが、見たことはありません。いったい、どんなものなのでしょう？」

冬弦は微笑み、袂の中に手をいれ、そこにあつたものを取り出した。それは、磨かれた濃藍の玉でできた数珠だった。

「これは、天竺の瑠璃ですよ」

その美しさに子供は息を呑み、食い入るように見つめて、やがて、うっとりとした瞳を潤ませた。

「こんなきれいなものは、見たことがありません」

瑠璃若という名前が、たいそう気に入ったようだった。

冬弦は次に、弟子の一人を呼び、瑠璃若を預けた。とにかく瑠璃若は汚れ果てていたので、身支度を整

えて稚児らしくさせるためである。

呼ばれた法師は、瑠璃若を斎屋に連れていき、まず身体を清めた。古着の水干を着せ、髪を背中あたりで切りそろえ、丁寧に櫛を通して、一つにしばり、垂髪にした。

冬弦のもとに稚児がやってきたというので、院内の法師たちが、好奇心を抑えきれずに集まって、その様子を眺めたり、手伝ったりしている。

はじめは、汚れの塊のようだった童を見て、尊師も物好きなど思っていた弟子たちだが、化粧をさせ、掃墨で眉を描き、齒に鉄漿を塗ると、愛らしい稚児が出来上がり、皆は驚いて眸を瞠った。

冬弦が様子を見に行った時には、「瑠璃若、瑠璃若」と名を呼び、取り囲んで「歳はいくつだ」「どここの生まれだ」と質問を浴びせていた。

瑠璃若は、どうしていいのかわからない態で、きよとんとしていた。僧院の稚児という立場が、よくわかっていない様子だ。これまでに寺とは縁がなかったらしく、物珍しげに、あちこちを眺め、法師たちを見つめている。

その様子が、捕まえられた小鳥のようで、かわいらしくもあり、また不憫でもある。

剃髪の法師ばかりの僧院で、有髪の稚児は特別な存在だった。法師が守らねばならぬ戒の中に、不邪淫戒というものがあつり、一切の性交が禁じられているため、院内にはむろん女性はおらず、その代償として、稚児が院内に彩りを添えるのである。

稚児は日常の座臥にも、女性らしさを求められ、躰けられる。走ってはならない、大声を出してはならない、音を立てて遺戸を開け閉めしてはならない。炭櫃に手をかざしてはならない。つまりは子供らしい

ことを禁じられるのである。山野を駆け回っていた童が、僧院に閉じこめられて、野生の手足をもがれるような生活をするのかと思うと、憐憫の念も湧く。

しかし、僧院に預けられなかったら、この子供は生きていけたかどうかもわからない。親のない子供が、生きていくのは難しい世の中である。

「あ、冬弦様」

弟子のひとりが、冬弦に気づいて破顔した。

「ごらんください、目も覚めるようなお稚児になりました」

冬弦は、うなずいた。見たこともないようなかわいらしい稚児姿である。ふつくらした頬、小さな口許、光をはじく瞳、丹精こめて作られた人形のようにだ。

「これでもう、延年などで、見目の良い稚児がいれば……、などと思ひ煩うこともありません」

よかつたよかつた、と微笑んでいる弟子を呆れたように眺め、冬弦は苦笑した。

「よかつた、と思うのは、おことたちであろう。さて、瑠璃若にとつては、果たして『よかつた』と云えるのか」

呟くと、意外や瑠璃若は、ニコリと微笑んで云うのである。

「私は、僧院というところがどんなところなのかもわかっておりません。これからなにをすればいいのかも、どうやってお仕えしていいのかも知りません。以前は道ばたで、ひとり飢えて、途方に暮れていた私です。それが、このようなきれいな僧院で暮らせて、食べる心配をしなくて済み、取り柄のないはずの私に、見目という取り柄があるとわかり、それがお役に立つというのなら、私にとつては『よかつた』と云

えますでしよう。耳に聞く、西方浄土さいほうじょうどというところに、たどり着いた気分でございます。慈徳坊も、冬弦様のもとならば、必ず薫染くんでんを得られるだろう、だから心配はするなど、おっしゃっておりました」

どうぞよろしくお願いいたします。と、手をつけて冬弦に深々と頭を下げ、周りにいた法師たちにも、右に左に丁寧ていねいに頭を下げた。

子供というもの、たくましさを知る思いの冬弦である。そこにいた弟子の法師たちは、感銘を受けて、目許を押さえ、冬弦も涙ぐんで、約束をした。

「おまえにとつて、良い師であるように、つとめましよう」

瑠璃若るりわが、非常に利口な子供だとわかるのに、時間はいらなかった。慈徳坊に教えられたという法華經ほけきやうは、すでにすらすらと誦經ずきやうでき、字を教えれば、たちまちのうちに呑み込む。様々な經本きやうほんや書物も、すぐに読めるようになり、漢詩も学び出した。乾いた大地に水をそそぐように、吸収するのである。では、これはどうだと教えた詩歌管弦、舞などの芸事げいごとも、驚くべき速さで上達し、あつという間に、ひととおりの基本に通じてしまった。

管弦や歌舞を教えたのは、冬弦の弟子の円恵えんけいという学侶がくりよだが、その上達のすさまじさに、驚き呆れ、自分では覚えるのに、たいそうな時間が要つたのに、と半ば恨めしがり、半ばたのもしく思っている様子だった。

「紫檀ざんたんは双葉ふたばより芳かほし、と申しますが、瑠璃若はそれでいくと、とんでもない鳳雛ほうすうのようでございます。これも、御仏みぶつが、信心深い尊師のために、天上より遣わしてくださったものでございましょう」

そう云い、瑠璃若の存在をありがたがった。

瑠璃若といえは、習い事が辛いとは思っておらず、おもしろがつて覚えてしまうようだった。物を覚えるということに特化しているらしく、学問や芸事だけでなく、僧院のしきたりにもすぐに慣れた。作法や行儀も難なく覚え込み、冬弦の身の回りの世話を楽しそうにするのである。

「師しの御坊ごぼう、羅漢らかんの刺繡ししうの九条袷せきはこちらにございます。法衣は、こちらと重ねてお召しになるとよろしいかと存じます」

法会の時など、冬弦が、どこにしまったのかわからなくなった法衣や袷せきをさがしていると、瑠璃若がさつと取り出して、着付けを手伝ってくれる。

「瑠璃若がいてくれて、本当に助かります」

徳高く、人々に尊ばれている冬弦にも、人らしい欠点があり、整理整頓せいとんが大の苦手だった。なので冬弦の私室は、これが僧侶の部屋なのか、と思うほど、散らかっていることがある。何冊もの書物を並べて閲えう読どくすることが多いので、冊子本さしほんや卷子かぎなどが散乱してしまい、時には大事な教典が、紛れこんで見つからなくなることもある。

これを、わかりやすいように並べて、書笈しょよくに整理したのも瑠璃若だった。本を散らかす側には、散らかし方の法則というものがあり、他人にはその繊細な法則はつかめないものだが、そのあたり、瑠璃若はちゃんと冬弦の心を察しているようだった。読みかけの本には、しおりを挟み、しおりに糸をつけ、糸の先に札をつけて背表紙に垂らす。その札に、なんの本かわかるように題名を書いておく。そうやって分類をした上に、手に取る頻度が高い順に並べ上げた。